

第31回院内学術研究発表会

平成31年 1月24・25日

1. 運転再開を希望する急性期高次脳機能障害患者に対する作業療法の関わりと当院の対応の現状

リハビリテーション技術課

○堀川 晃義 井上 紗希
岡 智子 大道 克己
大島 良太 土屋 葉
西村 暁子 岡田 祥弥
行山 頌人 井上 貴博
六山 梓 川合 寛
山上 遼 中野 朋子
沼田 梨奈 恵戸 直樹
森本 洋史 中島 正博
西野 陽子 藤本 智久
皮居 達彦

リハビリテーション科

松本瑠以子 田中 正道

本邦における高齢者の自動車運転事故への対応として、75歳以上の高齢者では免許更新の際、講習予備検査が導入され、認知症のスクリーニングが実施されている。一方、高次脳機能障害者の運転適性に関する判断基準はなく、医療者側の統一した見解もないため、医療現場での運転の可否について難渋することが多い。

脳血管障害急性期では76%が注意障害、78%が記憶障害、35%が失語症、43%が失行症を有し、通院時期に発症頻度は半減しているものの残存していることが報告されている。しかし、軽症者において、比較的ケアが行き届き、生体動作が限られる病院生活場面では、あきらかな高次脳機能障害は目立たず症状に気づきにくい。

我々作業療法士は、急性期からこれらの症状

の有無や程度を評価し、介入を行っている。今回、急性期に軽度高次脳機能障害を認めた患者への関わりを通して、運転再開を希望する脳血管障害患者への当院の対応の現状について報告する。

2. 患者満足度向上に向けて

～栄養課プロジェクトチームの取り組み～

栄養課

○井原 康行 本庄 規宏
岡本 眞弥 吉井 基博
穂苅 直輝 早瀬 寛子
小田 博之 武田 成喜
他栄養課スタッフ

栄養課では患者満足度の向上を目指し、2018年1月から5つのプロジェクトチームを立ち上げた。調理師全員が分担をしてチームメンバーとなりチームリーダーの下、各チームがそれぞれ目標を掲げ（①衛生管理・②献立の見直し・③調理作業手順・④患者サービスⅠ・⑤患者サービスⅡ）業務改善を行っていくという方法で活動を行った。各チームが考察を重ね月1回の全員出勤の日に管理栄養士とミーティングを繰り返しながら様々な方法で改善を行ってきた実践内容と患者からのメッセージを報告する。

3. 当院における気管支洗浄液細胞診併用の有用性についての検討

検査技術部

○井上 瞳 廣尾 嘉樹
永谷 たみ 春名 勝也
山本 繁秀

病理診断科

片岡 恵理 堀田真智子

伏見聡一郎

臨床検査科 和仁 洋治

【背景】当院呼吸器内科では気管支内視鏡施行時に経気管支肺生検（以下生検）や擦過細胞診（以下ブラシ）、気管支洗浄液細胞診（以下洗浄）を行っている。今回、癌細胞の検出状況について検討した。

【対象および方法】2015年8月から2018年3月までの期間に生検、ブラシ、洗浄を同時に行的、いずれかが陽性となった176例を対象とした。それぞれの陽性例を比較し、検体採取部位についても検討した。

【結果】生検、ブラシ、洗浄の全て陽性が109例、生検、ブラシのみ陽性が43例、生検のみ陽性が15例、ブラシ、洗浄のみ陽性が3例、ブラシのみ陽性が2例、洗浄のみ陽性が4例であった。全症例のうち生検陽性あるいはブラシ陽性は97.7%であった。また、検体採取部位を調べた結果、洗浄のみ陽性の4例はすべて上葉肺癌であった。

【考察】生検とブラシ併用で癌細胞の検出はほぼ可能であり、洗浄は必ずしも必要としない。洗浄併用が必要となるのは、上葉肺癌の場合と考えられる。

4. がん化学療法中に生じたストーマ周囲難治性潰瘍の症例

6階東病棟

○北原 邦彦 石川 暢子

感染管理室

松本由美子

外科

河合 毅 渡邊 貴紀

【はじめに】

直腸がんで化学療法（FOLFOXIRI + ベバシズマブ）を受けた患者が、ストーマ周囲に難治性潰瘍を生じた。医師、皮膚・排泄ケア認定看護師、病棟看護師が協働し、化学療法を続けな

がら治癒した症例を経験したので報告する。

【症例】

60代男性 直腸癌で多発肝転移があり、回腸双孔式ストーマ造設後に、化学療法を開始した。1コース目の治療を受け退院後に、ストーマ周囲に潰瘍を生じ、緊急入院した。潰瘍は、医師、皮膚・排泄ケア認定看護師、病棟看護師が協働してケアを行い縮小した。入院から4週間後にFOLFOXIRIを再開し退院した。退院後は月1回のWOC外来でフォローしながら、FOLFOXIRIを継続した。発症から4か月後に潰瘍は治癒し、ベバシズマブを再開した。その後、潰瘍が再発することはなかった。

【考察】

医師、皮膚・排泄ケア認定看護師、病棟看護師が協働し、銀含有ハイドロファイバーを用いたケアを行うことで、創傷治癒過程に基づく感染コントロールが行えた。

5. AST（抗菌薬適正使用支援チーム）による血液培養陽性例への介入効果

感染管理室 AST¹ 薬剤部² 同ICT³ 内科⁴

○畑中由香子^{1,2} 八瀬和佳恵¹
大石 博一¹ 明神 翔太¹
長久 剛¹ 久保西四郎¹
遠藤 芳克¹ 最所 裕司¹
邑上 達也^{2,3} 永井美由紀^{2,3}
山根 裕之² 佐古亜佑美²
玉田 智子² 石井 雅人²
上野 聖子² 奥新 浩晃^{2,4}

【目的】今年度2018年より院内にAST(Antimicrobial Stewardship Team)が組織された。ASが政府の薬剤耐性対策アクションプランの一方策とされる中、当院AST活動の一つとして血培陽性成人患者に対する抗菌薬使用に介入した。本活動の現状把握と評価により今後の活動に生かすことを目的とする。

【方法】2018年10～11月で血培陽性例のAS指標（抗菌薬の選択、投与量等）を後方視的に調査し、介入前と比較検討した。